

セガン研究話 ガセネタが世界を走る

誤訳・捏造・推定断定の世界

まずは自己批判から

冒頭から剣呑な物言いになるが、自身に対する厳しい批判も含めていることがこの表題の根っこにある。それというのは、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流－研究と大学教育の実践－』（全4巻、日本図書センター、2004年）は、もし再版をするのなら大幅な（あるいは全面）改訂をすべきだということである。叶うならば絶版にすべきだとさえ考えている。それほどに問題が多く含まれている。何をお前言っているのか、と非難されるとしたら、少なくともぼくが執筆等にかかわった部分については「墨塗り」にすべきだと自己主張をする。

ぼくがかかわった部分とは－

○瀬田康司名の各巻グラビア

○第3巻所収の雑文「特別寄稿 教育への目線－Civilisation か Culture か－現代学校創造のためにセガンを学ぶ

○第4巻 ぼくの署名が入っている箇所すべて つまり－

セガン・関係年譜

セガン著作・関係文献目録

④ドイツ

セガンへの追悼と報道記事

2)セガンの告別式(1880年10月31日)

①息子、E. C. セガン博士による挨拶

②友人代表の追悼の辞

(1)L. P. ブロケット博士(ニューヨーク州ブルックリン)

(2)マリソン・シムス博士(ニューヨーク)

3)セガンの追悼と評価 (『ニューヨーク・タイムズ』紙)

セガンの教具

ずいぶんと出しゃばったものだと我ながら呆れる。何故に「墨塗り」にする気持ちなのか。それは、一つにまったくの門外漢の口出しであったということ、二つに「セガン」理解を支えるための基礎教養が欠落していたということ。確かにパリ・コミュニケーションを少々学

んではいたけれど、それで得た教養ではとても太刀打ちできないのだ。三つにやはり語学力のあまりにももの貧困さであったということ、とりわけフランス筆記体とは初めて向かい合ったのであり、フランス人の知人 R 氏に助力を乞うたけれど、その彼も筆記体を十分には理解できなかったようだ。結果的に彼の助力のいくつかの部分においてさえ誤認・欠落があるのだから。四つに「セガン」を読み解く学力の欠如ということ、である。すべて清水寛氏からの依頼を受けてなしたことであるゆえ、五つに、依頼を断る勇気を持たなかったという人間性の問題もあげられよう。

しかし、同時進行的につぶやいていたのは、「これは自分がやるべきではない、能力に余る、セガン研究者やフランス文化史の研究者がやるべき課題だ。」ということであった。60 歳になりなにする時から始めて、独学でしか勉強してこなかった — たとえば語学学校に行く、とかそういう問題も含まれるが、共同研究の場で「たたかれる」ということさえしなかった — フランス近代教育史力、フランス語読解力なのだから。もちろん障害児教育、医学の分野についてはまったく無知無識の状態。無謀にもほどがある。依頼者は期待に充ち満ちていたのだろうが、こちらがそれはお門違いです、と言えばよかっただけのことなのに。

結果的に、成したことに残された痕跡は、誤訳、誤解などなど、とても「研究成果」とは言えない作品ばかりである。この書物と清水寛氏に日本社会事業史学会から文献資料賞が授与されたことをお祝いする会を開いた席(2005 年 7 月 2 日)で、尊敬する同窓の先輩古沢常雄法政大学名誉教授が、ぼくに、「川口君、誤訳が多いねえ。」とソフトな語り口だけれども厳しく語りかけてきた。ドキッとした。一番恐れていたことだからだ。

自らが自らに招いた「屈辱」感。へらへら笑って対応していても、ぼくの内面はぼくによって表現されない限り、誰にも理解されることがない。だから、ぼくは、「セガン」という「公の場」から身を引くことも可能だった。清水寛氏が、「2012 年のセガン生誕 200 年祭の国際シンポジウムに参加し、できればフランス語で発表しましょう、そのためにセガン研究会を立ち上げましょう。」と言い、実際に研究会を組織し会報の発行も始まったその2ヶ月後の2005年秋口には、「ぼくはセガンどころではない、近藤益雄に命をかけています。」と、ぼくに「宣告」したように。そうしても誰も異論は挟まない。

しかし、「屈辱」感は自身に常に向かい、襲い来る。これを晴らさないことには、ぼく自身の人生末期を落ち着いて送ることができないのではないかと。そういう「恐怖感」のようなものが生まれ始めた。

それから逃れたい。ではどうやって。障害児教育の専門的発言はできっこないけれども、埼玉大学在職中からこだわってきた「自立」(近代的自我の確立)の問題として、「セガン」を素材にして考え深めたい、との思いを定めた。2005年7月2日の「祝う会」でのぼくの基調報告のようなもの「エドゥアール・セガンについて分かりつつあること」を準備するプロセスで、清水寛氏が、あなたはセガンをネガティブに見ていると、ぼくを厳しく非難した課題を、捨てずに発展させたい、という、ある意味「悲壮な決意」を固めて、セガンにかかわる文献を読み進めていったのであった。

以下は、こうした問題意識から捉えた「学研究・セガン」の致命的な問題性、活字化されない問題性を皮切りにした一指摘である。

偽情報(捏造)のいくつか

2003年の11月のある日、清水寛氏が会うなり、「今、お金を振り込んできたのです。」とにこにこ顔を見せて、語りかけてきた。話によると、「セガンの自画像を埼玉大学図書館の図書館司書氏がインターネット上で見だしてくれました。10,000円払うと画像を使用する権利が生ずるそうなのです。」と。それは朗報。ぼくも大いに喜んだ。そしてその画像は清水寛編著『セガン 知的障害教育と福祉の源流ー研究と大学教育の実践』(前出)の第1巻グラビアページに「右

壮年期のセガン自画像 油彩」とのタイトルで収載された。タイトル文言は清水寛氏の原稿による。説明に、National Air Survey Center. T/A Visual Image Presentations, USA. より写真購入。いつ頃描かれたのかは不明。」との説明書きがつけられた。

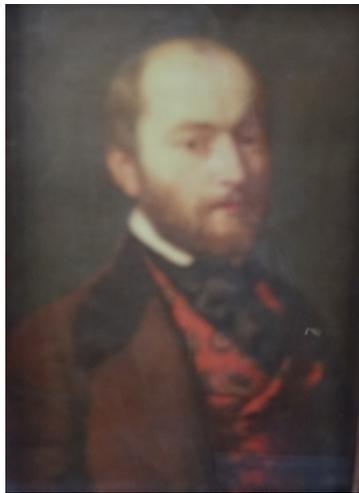


FIG. 2. EDOUARD SEGUIN (1812-1880).

この写真が油彩画だというのはどうして分かるのだろう、そもそも版元への入稿の際のデータはモノクロであったが、清水氏が入手したデータはカラーだったのだろうか(つまり油彩画だとより分かる一助となる)。清水氏がモノクロ写真を見せながら、しきりに、清水氏ご自身が絵を描くから分かるのだとの言葉を添えて、ポーズや色の濃淡を示し、セガンが描いた自画像だと説明してくれたのだが、得心がいかないままでした。

後年、清水氏に改めて詳しい入手方法について問い合わせ、添え書きデータの信憑性を尋ねた。確か「司書がそう言っていた。」と、他者に責任を転嫁するご発言があったと思うが。ともかく、明解な回答はいただけなかった。インターネット操作を繰り返している内に、写真データは、アメリカ特殊教育センターの写真データ・ボックスにあり、誰でもアクセスすることができることを知ることが出来

ていた。だから清水氏は無駄な 10,000 円を支払ったことになるのだが、それはともかくとして「自画像」という判断根拠はどこにあるのだろうと、考え続けた。写真の大本おおもとが見つかれば問題解決なのだが、アメリカのデータベースの説明ではそのようなことが書かれていない。「1850 年頃」ではなく「1850 年」の写真だと明言をしているのが、ぼくにとっては新しい情報ではあったのだが。



この問題に決着をつけることができたのが、2012 年 10 月 27 日 28 日にクラムシー多目的ホールで開催されたセガン生誕 200 年記念国際シンポジウムの会場に展示されたセガンを描いた油彩画だった。写真立てにそれは収められていた。展示者はアンナ・ヒルトン女史。すぐ側には問題のモノクロ写真も置かれている。ヒルトン女史に、油彩画とモノクロ写真との関係性を尋ねた、油彩画が先にあってモノクロ写真でデータベース化したのか、と。女史は頭を横に振る。モノクロ写真はパスポート用であり、それを元にして、当時は有名な画家が描いたセガンの肖像画であり、自画像ではない、50 万

円で買ったとの付加情報を添えて説明してくれた。

ぼくはやはりアンナ・ヒルトン女史の説明を信頼する。根拠を示さない限り、清水寛氏は、情報を捏造したことになる。小さな情報とは言え、セガンは自分で筆をとって絵を描くことができる人だったという人格像が確定しかねない誘導情報であり、この清水編著が先行研究として使用される限り、ついて回るのだ。

同じように偽(誘導)情報によって、セガン研究に強い影響を与えている問題がいくつか存在する。それらについて、典型例を出して、触れておきたい。

2003 年 11 月 3 日、職場の研究室で、ぼくは素っ頓狂な声を挙げた。「ヒエー！」

その頃、研究室によく顔を出していた学生が、さも心配そうに、「先生、どうしたんですか。」と声を掛けてきた。

「古本屋に頼んでいたセガンの翻訳書が今日届いたんだけどね、それには、ぼくは、違う、あり得ない、と考えていたことが、逆に、そうなんだ、事実なんだ、と思わされること書かれているんだよ。」
「それは困りましたね。」

ことの次第は次のようである。

ーエドゥアール・セガンは、フランス時代に医師でありながら、白痴教育を開拓した。一人の白痴の子どもの教育に成功し、その業績が高く評価され、フランス政府は彼を、二つの大きな精神病院の教師として招聘した。一つは「サルペトリエール院」であり、あと一つは「ビセートル院」である。ー

これが、ぼくが「セガン研究」の世界を垣間見た 2003 年当時の我が国の定説だった。すべてが初めて耳にすることであったので、そのまま受け入れてものごとを考えていけばいいものを、清水寛氏から、氏が執筆しようとしているセガン研究への協力、とりわけフランス時代についての資料検索等の協力を依頼されたため¹、入手資料をファックスでお届けしていた。そうした作業の中で、「サルペトリエール院」はあり得ないのではないか、と思うようになっていた。

というのも、セガンが教えた子ども集団というのは 20 歳以下の男子であったと、多くの資料に書かれている。ところが、その時代「サ

1 「ぼくはインターネットを使えないので、川口さん、やってくれませんか」という申し出で、ネット検索、データのプリントアウト提供をし始めたが、じつは清水氏、フランス語が読めない、という。えっ・・・40 年間、セガンを研究し続けたのじゃなかったの？「至急、訳出してください。」その始まりが 2003 年 11 月以降。それ以来、清水氏は「言葉がていねいで優しい口調のご主人さま」となり、ぼくは「手足頭金すべて自前持ちの従順な下僕」となった次第。その時々には、「清水先生のご依頼を少しでも叶えることができるのなら、こんなぼくでも人様のお役に立てるんだ」という悦びが強かった。今や自己嫌悪。

ルペトリエール院」は女子専用施設であり、制度上の名称は「女子養老院」とされていた。革命後のフランス社会は頑なに男女別施設にこだわっていたことの一つの「証言」となる。「サルペトリエール院」というのは日本独自の呼び方で、現在は一大総合病院(現在名: ^{オピタル ド ラ ピティエーサルペトリエール} l'Hôpital de la Pitié-Salpêtrière)、セガンの時代は総合的な救済施設ー女子養老院、産院、浮浪者収容施設、精神病院などーで「ラ・サルペトリエール救済院」(訳者によっては「サルペトリエール救貧院」^{オスビス}「サルペトリエール施療院」ともされる)と通称されていた(^{ド ラ サルペトリエール} de la Salpêtrière)²。そういうことも学習した。ついでにいうと、「ビセートル院」は男子専用施設³。

「清水寛先生と行く、『エミール』・セガン・21 世紀平和への旅」の空でも、この問題について、かなり激しく議論をした。「アメリカのセガン研究で博士号を取った人がそう言っている⁴のに、川口さんは、

2 フランスのあらゆる文献では、略称として、“la Salpêtrière” が用いられているように、「ラ・サルペトリエール」というのが固有名詞にあたる。ぼくは「サルペトリエール院」という用語を自己概念として使用していない。

3 「ラ・サルペトリエール」と同じように、現在名: l'Hôpital de Bicêtre、歴史名: l'Hospice de Bicêtre。

4 Mabel E. Talbot: ÉDOUARD SEGUIN – A Study of an Educational Approach to the Treatment of Mentally Defective Children, Bureau of publications, Teachers College, Columbia University. New York 1964. 翻訳書『エドゥアール・セガンの教育学』(中野善達・清水知子訳、福村出版、1994 年)

それでも間違いだということですか？」に始まる論理展開で自説を曲げようとしな^{水戸のご老公の印籠}い。ぼくはぼくで、博士論文という「^{これが目に入らぬか!}権威提示」に動じるはずはなく、フランス社会の文化的伝統を 2000 年以來肌身を通じて感じているので、譲るはずはない。そして清水氏はついにこう言った、「白痴なんだから、男女別にこだわる必要はない」。果たしてそれはどうか。性的な問題は根源的な問題であり、「こだわり」の歴史の連続であったのではないか。

「とにかく、川口さんの自説を実証しなさい。」と吐き捨てるように言った。

その後、頼まれたから資料を検索するというばかりではなく、自分から求めて、セガンが「白痴」の子どもたち 10 人の集団教育に「成功」した場がどこであったのかを、確定する作業を頻繁にするようになった。いかんせん、インターネットしかその手段はない。それでも、入手しうるフランス語資料でセガンが実践を行った場は、^{ホスピス ドゥ アンキュラブル}l'Hospice des Incurables という施設であったことが判明した。訳すれば「不治者救済院」となる⁵。

⁵ 至急丸善を通して入手したタルボットの博士論文に、この名の英語名として、the Hopital for Incurables として登場し、それは 1841 年から 42 年の実践の場とされている。これは本文での記述だが、「preface」では the *Salpetrière* と明記されているのだ。

ただ、公文書やセガンの著作で確認した情報ではないので、そのための手段として、その施設での実践記録⁶が訳出掲載されている翻訳書⁷の入手をしたというわけだ。

翻訳書冒頭部がくだんの実践記録である。その扉ページに「不治者施療院理事会への報告＝サルペトリエール院における実践の最初の三ヶ月間のまとめ（一八四二年）」と明記されているではないか！ やっぱりか。その他にあたった研究書・翻訳書でも、たとえば松矢勝宏氏の『大井清吉・松矢勝宏訳『イタール・セガン教育論』（世界教育学選集 100、明治図書）』解説論文他において、「サルペトリエールの不治永患者院」とか「サルペトリエール院の別院」とかの表記が見られる。また、津曲裕次氏は、『『白痴の使徒』エドワード・セガンの生涯』（奈良教育大学研究紀要、1969 年）において、「サルペトリエールの精神病院 the hospice des Incurables」との表記をしている。このように、我が国のセガン研究にかかわる著作・翻訳書から「サルペトリエール」の文字のないものを見つけることは困難であった。

⁶ 1842 年著書『精神遅滞児と白痴児教育の理論と実践－不治者救済院の白痴の青少年に対する授業』（Théorie et pratique de l'éducation des enfants arriérés et idiots. Leçons aux jeunes idiots de l'hospice des Incurables. Paris. Chez Germer Ballière. 1842.）

⁷ 中野善達訳『エドアール・セガン 知的障害児の教育』福村書店、1980 年。

でもでも・・・先ほどのセガンの実践記録の翻訳書に話は戻るが、本当に原文にそう書かれているのだろうか、ひょっとして、訳者が書き加えたのじゃないか。

グジグジ考えても埒があかない。中野善達氏に直接問い合わせをしようかとも思ったが、躊躇した。「セガン」のイロハも知らないくせに何を言っているのか、とお叱りを受けるのではないかと怖じ気ついたので。この怖じ気は、他の人の、他の問題で被った、嘲笑に近い扱いをされたことで、あながち間違いではないと思う。他の人の、他の問題とはなんだということは、セガン研究にかかわることという言葉以外、ここでは具体的にしないけれど。そうとなれば、セガンの原著を入手するしか、実証方法はない。

こうして、ぼくの、セガン研究筏が錨を揚げた次第なのだ。しょせん、自然の流れ任せではあったが。

2003年8月にパリで、テュエイエ、ペリシエ両者編集になる『子どもの精神医学の開拓者 エドゥアール・セガン (1812-1880)』(Thuillier et Pélicier, Un pionnier de la psychiatrie de l'enfant Edouard Séguin(1812-1880))という史料集が入手できた。これはセガンのフランス時代を史料的に明らかにするもので、グジグジするぼくの海路の有力な日和となるはずであったが、読むという行為の

ために腰を上げるには、当時のぼくのフランス語力では、重すぎた。しかし、その年の11月に入って清水寛氏から、掲載史料の编者による解説文だけでも訳出してほしい、との緊急の依頼があった。ことはついでにと、セガンの教育実践と la Salpêtrière とをつなぐ史料を同書で丹念に探したが、見当たらない。l'Hospice des Incurables は容易に見いだせる。このことから類推されるのは、フランスではセガンと「サルペトリエール院」とを直接つないで語られてきてはいない、ということだ。「ヒュー！」の声を挙げてさほど日が経っていない頃のことだった。

この時点でぼくは、「セガンはサルペトリエールでは実践していない」と確信し、確定情報として清水氏に届けた。氏は「その確定は保留する」との返事、完全否定からは一步離脱したということだ。

前述のセガン史料集の中に、セガンが、自力創設をした学校の入っているアパートの大家とその管理人を相手にして損害賠償を求め裁判を起こしたことを報じる、1841年2月4日付の司法新聞『ガゼット』紙の記事が載せられていた。裁判自体は、セガンが悪しき風評を立てられたため、彼が自力で興した、知的障害の子どものための教育施設への入学の問い合わせ行動を妨害され、それ故セガンは損失を被った、というものである。ぼくが目に止めたのは、その

記事の本筋もそうだが、冒頭部に、「二つの不治者救済院に白痴の若者たちの教師として雇用された」という内容が綴られていたことであつた。「二つの不治者救済院⁸」？それを解く鍵は、1840年11月16日の『ル・モントゥール』紙に次の記事が掲載されていた。

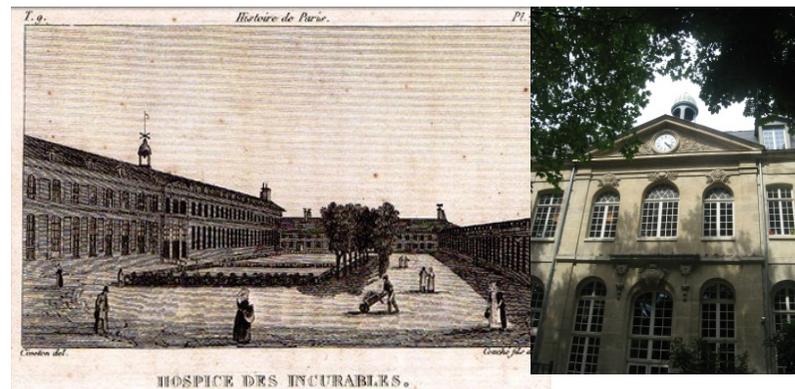
「この11月4日の救済院総評議会の決定により、パリ、ピガール通り6の、白痴児、痴愚による唾などの教育施設長エドゥアール・セガン氏は、白痴の青少年の教師身分で、セヴル通りとフォブール・サン＝マルタンの救済院に雇われる。」

インターネット検索を繰り返した。結果データとして、男子用の不治者救済院と女子用の不治者救済院とがあり、男子用のそれはセーヌ川右岸のフォブール・サン＝マルタンに、女子用のそれはセーヌ川左岸のセヴル通りにあつた、との情報を得た。ひょっとして、男子用のそれが「ピセートル院」であり、女子用のそれが「サルペトリエール院」かとも思えたが、パリ・コムニオン研究で買い込んであつた1850年以前のパリ地図数冊数帖でそれぞれを確かめたところ、それぞれはまったく異なるのだ。従つて、中野善達訳『エドアール・セガン 知的障害児の教育』の冒頭に書かれていた「サルペトリエ

⁸ その後知り得た公文書には、しばしば、les Hospices des Incurables という表現が登場する。これは「不治者救済院」の複数表現。いくつあるかは直接的には書いていない。

ールの不治永患者院における教育実践」には、「サルペトリエール」という偽情報が書き加えられていることが強く推定された。

セガンは男子の子どもを指導した、という情報に従えばフォブール・サン＝マルタンの不治者救済院でセガンは実践したはずである。それを何とか、セガンの口から語らせる方法はないものか。中野善達氏の訳文をつらつら読んでいたら、訳文として落ち着かない日本文なのだが、主旨として、(セガンは)男女の不治者救済院に呼ばれたけれども女子の方は携わらず男子のみでの実践であつたという旨の記述がある！セガンが1841年と42年に実践した場合は、旧パリ2区、フォブール・サンマルタン男子不治者救済院、それ以外を考えるべきではない。



この考えに絶対の確信を持ち、清水氏に報告、氏は『セガン 知的障害教育・福祉の源流ー研究と大学教育の実践』のグラビアページに、「男子不治者救済院」を写真で入れたいので、是非写真を撮ってもらいたいとの希望が出された。それでぼくはパリ在住の瓦林亜希子氏に取材をお願いした。2004年3月中旬のことである。瓦林氏は、ぼくとメールで情報を交換しながら該当地域を探索し、ついに、現在の「レコレ国際交流センター」が入っている建築物が、18世紀のレコレ修道院建築物を利用したものであり、1802年からその世紀の半ばまでは「男子不治者救済院」であったことを突き止め、グラビアに収める写真を撮り送ってくれた。我が国のセガン研究史上、初めての写真情報であり、清水氏が非常に喜んだのはいうまでもない。

同施設についてその後も文献等によって調査を進めてきているが、現在の建築物は、「男子不治者救済院」のごく一部でしかないようである。かつてのその全容を描いた銅版画の存在を知ったのは、2013年のこと。拙著『一九世紀フランスにおける教育のための戦いーセガン パリ・コミュニケーション』（幻戯書房、2014年）に収載した。銅版画に描かれた建築物の正面（ファサード）の様子はそのまま現在にも残っている。（写真・前ページ）

.....<挿入資料>.....

CHAPITRE. 5. <i>Des hospices de Bicêtre et de la Salpêtrière.</i> . . .	Pag. 635
Sect. 1 ^{re} . <i>Dispositions communes aux hospices de Bicêtre et de la Salpêtrière.</i>	635
Sect. 2. <i>Dispositions particulières aux hospices de Bicêtre et de la Salpêtrière.</i>	640
§ 1 ^{er} . <i>De l'hospice de Bicêtre.</i>	ibid.
§ 2. <i>De l'hospice de la Salpêtrière.</i>	651
CHAPITRE 6. <i>Des hospices d'Incurables et de l'hospice des Ménages.</i>	655
Sect. 1 ^{re} . <i>Des hospices des Incurables Hommes et Femmes.</i>	ibid.
Sect. 2. <i>De l'hospice des Ménages.</i>	661

これはパリ施療院・救済院・在宅救護に関する法令集(Code 集)の目次(一部)のコピーであるが、一目して、Chapitre5には「ビセートル」と「ラ・サルペトリエール」に関する規定が、Chapitre6には「不治者救済院」についての規定が収められていることが分かる。そして男(homme)女(femme)施設を総称して(les) hospices des Incurables としていることも理解できよう。明確に、「サルペトリエール院」と「不治者救済院」とは別機関であることが示されているのだ。また、同規定集で、男子不治者救済院はフォブール・サン＝マルタン(faubourg Saint-Martin)に、女子救済院はセヴル通り(rue de Sèvres)に設置される、とされている。

.....<挿入資料終わり>.....

それにしても、なぜ、男子不治者救済院が「サルペトリエール院」だと記述されたのか。そのソース元は何なのか。その問題を本格的に考えるようになったのは、2005年2月25日、セヴル通りにある「ネッカー子ども病院」(旧「病弱児施療院」)を訪ねて以降のことに

なる。先に触れた中野善達氏が、セガンが最初に教えた「白痴」の子どもは「病弱児施療院」に収容されていた子どもであった、と書いていた⁹。訪問の主目的は中野説の確証を得るためであった。これは、清水寛氏に「ぼくが大学院生時代に「先人が歩いた道を重ね歩いて後にしかるべき研究が始まるのです。」と教えられたことを忠実に実施したのであった。ただし、中野氏が「歩いて」この情報を入手したかどうかは不明であるけれども。しかし、同病院ならびに関係公文書の収集・保存・保守管理・閲覧提供を担っているAP・HP古文書館に保存されている、入退院、死亡者名簿には該当児童名はなかった。脱線的に、後日、医療史書籍で、セガンと関わりのあった病弱児施療院の院長ゲルサンがパリ市内にクリニックを開いていたことの情報に接したぼくは、そのクリニックー裕福な家庭を相手に開業ーが、セガンが居住していたごく近在であったことを知り、病弱児施療院の名簿に該当児童名がなかったことと併せて、中野説を完全否定で捉えるようになった。中野氏は、推定事項を断定事項に書き換える悪癖がおりだということは、他の事柄についても明確になっている。後に続く者は氏の断定情報を手がかりとして研究を進

⁹ 中野善達「イタルの『アヴェロン』の野生児』の教育実践とセガン」、清水寛編著前掲書、第1巻。

めるのだから、研究成果もいびつにならざるを得ないのだ。ぼくが清水氏に、2003年6月頃、「セガンがサルペトリエールで子どもを教えたというのには、どのような根拠があるのですか？」と尋ねた時、氏は、先に挙げた中野訳本をためらうことなく提示したのほどなのだ。

子ども病院訪問の時のことに話は戻る。訪問に対応して下さった副院長との会話の中で、女子用の「不治者救済院」に話題が及んだ。「今は廃墟になっており、中には入れませんが、建物は残っており、セヴル通りにあります。この近くです。」と情報を提供してくれた。帰路、高鳴る胸を押さえて、廃墟を訪ねたことはいまでもない。「女子不治者救済院」は油彩画で描かれ作品がカルナバレー博物館（パリ市歴史博物館）に常設展示されていること知ったのは2013年のこと。当時出版を前提に執筆中であった拙著『一九世紀フランスにおける教育のための戦いーセガンーパリ・コムューン』に収載すべく、担当編集者の三好咲氏とともに訪れ写真に撮った。現在は完全に取り壊され、新しい都市計画の下でマンション等が建築されつつある。

これで疑問が解消されたわけではないことはもちろんである。やはりソース元を特定しなければならない。



廃墟の女子不治者救済院



油彩画の女子不治者救済院

片っ端からセガンを直接対象としているフランス語文献を、インターネットをも利用して、検索しはじめた。フランス国立図書館のデータベースサービスを利活用する。しばしばセガン論で登場する D. M. ブルヌヴィル (Bourneville 1840-1909) については、19世紀末から 20 世紀初頭にかけて、セガンをフランス社会に「復活」させた人だと聞かされていたので、とくだんに注意を払って文献の検索にあたった。

ブルヌヴィルが、1889 年 7 月 12 日のフランス下院で行った緊急提案「上院で合意を得た、精神病者に関する 1838 年 6 月 30 日法改正に向けて、法案作成の任を持つ委員会の名でなされた報告」を読んでいるうちに、このブルヌヴィルのセガン論が、後のセガン研究のストーリーづくりに大きく貢献していることが分かった。もちろん

ん功罪併せてのことである。たとえばそれは、松矢勝宏氏の研究「エドアール・O・セガンー知能障害児教育の父、人類の教育を求めて」（1981 年。セガン 1846 年著書翻訳解説）や津曲裕次氏の初期論文などに、色濃く反映されている。

それらについて語るのがここでの目的ではないが、ブルヌヴィルは、同提案で、セガンがセヴル通りの不治者救済院で教育実践を行った、と明言しているのではないか！ 彼は 20 世紀前半期のフランスの知的障害児の医療教育的政策や施設づくりの立役者であった。彼がそう書いているから、誰も疑うことがなかったのだと推測できる。しかし、と思う。そういう人でありながら、男子施設と女子施設との判別をどうしてしなかったのか、と。

さて、アメリカのタルボットがなぜ、ラ・サルペトリエールでセガンが実践したとみなしたのか。セヴル通りの「不治者救済院」が女子施設であることを知ったので、同種の女子施設であるサルペトリエールと同一視したという推論が成り立つ。その推論の根拠は次のようである。当時、ヨーロッパ各国で知的障害者のための医療教育施設の整備が進んでいたが、その一環で、一人の関係者(ベルギーのクロムランク博士)による視察がセガンの「男子不治者救済院」での実践に対してなされている(その旨はセガンの『1842 年第二著作』

の冒頭に綴られている)。その報告書にタイトルされているのが「ビセートルの出先機関 (succursale)」であった¹⁰。つまり、男子不治者救済院はビセートルの支部門であるという理解がされていたのだ。女子不治者救済院に関する同様の証言的記述はまだ探し得ないが、タルボットは類推したに違いないだろう。あとは無検証コピーをし続けたというわけだ。しかし、1840年代の救済院・施療院の統廃合が進められている中で、男子不治者救済院と女子不治者救済院に収容されていた者たちが、ビセートルとラ・サルペトリエールに移管されたという史実はあるが、法制度的に一体であった史実はない。

元凶は、まず、ベルギーのクロムランク博士の視察報告、続いてフランスの児童医学と知的障害の医療教育の権威者ブルヌヴィル、そしてアメリカ・タルボットのセガン研究－博士論文－であった。ブルヌヴィル以降のフランスでのセガン研究がタルボットと同じ誤りをしてはいないというのも、じつに面白い現象だと、ぼくは思うのである。しかし、セヴル通りの不治者救済院での実践説を採り入れている叙述は見受けられるのだが。

じつは、これらの問題は、藤井力夫前北海道教育大学教授が、「2001年8月6日、記」という脱稿の日付の入った論文「E. セガンはどの

¹⁰ 前出のデュエイエら編のセガン史料集の解説による。

ように障害児教育を始めたのか－初期教育実践 (1841－42) にみる理論的再構成の基本的立場－」で詳細に述べているのだ。ぼくと藤井氏との違いといえば、ぼくが「不治者救済院」というのに対し、藤井氏は「不治者施療院」とする、というぐらいのもの。もちろん、藤井氏の論稿の方がはるかに詳細であり精度が高い。

この論稿は清水寛編著『知的障害教育・福祉の源流－研究と大学教育の実践』(前出)の第2巻冒頭部に収録されているもので、他の諸論文をはるかに凌駕するセガン教育実践研究の質の高さと実証性を誇っている。藤井論文は、先ほどの脱稿年月日より後年に、『北海道教育大学紀要、教育科学編』に掲載されている。ぼくは、結果的には、藤井氏の後追いをしたにすぎないが、「セガンはラ・サルペトリエールで実践はしていない」という気づきの^{いちこんきょ}一棍抛として清水氏に藤井論文の存在を明言したのは、編著書入稿ゲラの素読を求められた2003年12月に入ってからであった。さすがに藤井論文の存在を無視してまで「サルペトリエール院」説に拘泥することができなくなさせたのは、清水氏の同書編集者の矜持からであったのだろうか。

だが、同じセガン研究の開拓者である津曲裕次氏は、氏の近年の論稿「セガンとその教具について」(モンテッソーリ研究第48号、2010年、日本モンテッソーリ協会)において、「サルペトリエール

院」説を引き継いでいる。氏の論稿には藤井論文を先行研究として
いる痕跡は残されているのだが(併せて、ぼくの『知的障害教育の開
拓者セガンー孤立から社会化への探究』(新日本出版社、2010年)も)、
一切クリティーク無しである。藤井氏とぼくの説と大きく矛盾する
津曲説であるにもかかわらず、「(氏のこの論文によって)セガンの生涯
と業績についてはほぼ明らかにすることができた」と断言する。論
証無しの自説を本文に綴り、その内容を実質批判する諸文献名を注
記するだけなのだから、ぼくから書簡で他の研究成果・到達を無視
していると揶揄されるのは当然のこと。その揶揄に対して「無視し
ていません」と反駁召されても、論理上、何ら説得性はないのだ。

ところで、2004年初頭、清水寛氏から一人の研究者の紹介を受け
た。星野常夫文教大学教授である。清水氏から星野氏はブルヌヴィ
ルの研究者だと紹介を受けた。その課題で博士論文執筆を目指して
いたが、すでに同課題でパリ第5大学で博士号を得た人がいるので、
星野氏は断念した、とも情報が付加された。真偽のほどは分からな
い。もし本当のことなら、遠慮することないのに。それはともかく
星野氏と面識を得たのはこの時が初めてで、清水氏の大編著刊行に
向けて、ともに実務奮闘した仲である。清水氏から聞かされた笑い
話のようなことであるが、清水氏が星野氏にぼくのことを情報提供

した際の星野氏のリアクションは「その人、誰？」であったそうな。
障害児教育の分野、フランス教育史の分野、そして教育学の分野で
も、ぼくの名前を聞いたことがない、もちろん業績など知るわけが
ない、そういう星野氏の胸の内は、とてもよく分かる当時の(現在も
そうだが)ぼくの客体ではあった。

その星野氏、セガンについて研究論文で言及しておられる。その
中の一本に、セガンは前日の会議に欠勤したため誅首されたという
生史料を発掘した、という注目すべき記述があった¹¹。清水氏編著
書にも収載されたこの論文の重大さを理解したのは、2006年のこと
である。

当該論文の中で、氏は、1994年の春、「セガンのビセートル院『辞
職』に関する重要な史料を見つけることができ、いままで不明であ
ったいくつかの事項を確認した。」と報告する。事項の一つに、セガ
ンが「ビセートルを辞めた理由は、自ら辞職したのではなく、罷免
であった。」としている。確かにこの事実の発掘は、それまでの「セ
ガン神話」の結末をひっくり返すほど、重要なことがらである。

さらに氏は指摘する、セガンは「前日の会議に欠勤したため」誅

¹¹ 星野常夫「フランス19世紀後半の知能遅滞児教育の展開」(大井先生退官記
念論文集刊行委員会編集『障害児教育の探求』田研出版、平成7年)

首されたのだ、と。星野氏もこれには「あまりにも唐突すぎる」と大きく首を傾げる記述をしているが、「セガンは（1843年）10月には、19回も授業を欠席している」との史実をつけ合わせて、「前日の会議欠勤による齧首」の整合性を求めている。

そういえば、清水氏から、2003年5月にだったか、セガン研究への案内をいただいた折に、「セガンは会議に欠勤をしたためにビセートル院をクビになったそうですね。」との情報をいただいたのだった。そんなバカなという思いと、フランス社会ならあり得るかもという思いとが交錯したものである。

このように、星野氏の研究成果は、間違いなく我が国のセガン研究に影響を与え、一つの歴史像を創りあげていくはずである。ぼくの思いの交錯の一方の「そんなバカな」は打ち消さざるを得ないではないか。

さて、星野氏が根拠とするところは、「ビセートル院退職者の原簿」という史料にある。その中に「今月20日の会議を休んだことにより罷免」という根拠が書かれている、とする。この限りでは、そうなんだ、と頷くしかない。星野氏は原簿記載の原文を起こして論文に載せている。次の通りであった。

Révoqué par arrêté du conseil du 20 de ce mois.

これを目にした瞬間、また誤訳・誤認かい！と、あきれさえ感じた。セガン研究は、何故に、こうも誤訳・誤認がリードするのだ！

AP-HP古文書館の存在を知ったのは2005年2月のこと。それと同時にAP-HP博物館が存在するという情報にも、初めて接した。博物館の方は2005年8月に訪問し、セガン教具の実物数点を目にする事ができたのだが、古文書館を訪問する事ができたのは2008年11月のことであった。セガンの白痴実践についてどのような審議がなされ、どのような決定が為されたのかを調べるべき史料は

「救済院総評議会 (le Conseil Général de hospices¹²)」の審議録。この存在は2005年8月に、救済院・施療院等に関する法令集を古書店から入手してあったので、知っていた。もちろん実物は未見であった。

窓口の男性係官が懇切ていねいに対応してくれたおかげで、それまでまったく不明であったセガンの公的記録に残された像が浮かび上がってきた。それらを紐解くと、セガンは上司の管理命令に不従順であったこと、無断欠勤を繰り返していたこと等が分かる。そして、~~セガンを「白痴の教師」として雇用する契約~~¹³が切れるにあ

¹² 1801年から1848年まで設置された。審議会メンバーは内務大臣によって任命され、11人のメンバーによって構成されていた。
¹³ 日本のセガン研究では「招待された」「招かれた」「招聘された」などと表現されてきた。その原因は、セガンは「無給」で教育に携わったと回想していたからだろうと、推測される。ぼくもまた、先行する研究者に影響され、原史料を

って、1842年10月12日の救済院総評議会決定に示されていた「1843年度の任期切れの際、この教育者によって得られた結果について、総評議会に報告書を提出すること」の通り、再雇用をするかどうかの検証をして後、1843年12月20日、救済院総評議会の会議を経て、「セガン氏は白痴児の教育者の職務を解かれる」ことが決定された。星野氏が発掘したビセートルの「退職名簿」に記載されていた「*»Révoqué par arrêté du conseil du 20 de ce mois.*」は、「今月20日の会議を休んだことにより罷免」なのではない。*par arrêté du conseil*が完全なる誤読。*arrêté*には「(裁判などの)判決」という意味があり、この時代、議会などの「決定」を示す語として使われていた。*conseil*は確かに「会議」の意味であるが、その会議が特定されていると理解できる。すなわち、パリ市全体の救済院・施療院・在宅救護に関して管理・運営する任を得ている総評議会のことである。人事権、予算権をも有している組織であり、星野氏の理解のように、総評議会に統括され管理下に置かれているビセートル救済院が単独で人事を策定することはあり得ないのだ。

なお、今日、これらのことを正しく理解するためには、『パリの病

きちんと読み取ることができず、著書『知的障害教育の先駆者セガンー孤立から社会化への探究』において、「召致」との表現を用いている。

院について 12世紀から20世紀、AP-HP 古文書館蔵書目録』(2000年刊行)が公刊されているので、格好の手引き素材となるだろう。

最後に、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流ー研究と大学教育の実践』は、収録稿ーセガンならびに周辺・関連研究ーのほとんどが既発表論稿である。このことについては「編者清水寛」によって明示されていない。ぼくは編集の最終段階で参入しただけであり、この間の事情を斟酌する立場にはないが、一般読者の立場からすると、それぞれが署名入り論稿であるので最終的には執筆者に責任があるけれども、かくも多くの問題点(論理矛盾、情報混濁等)が含まれている「学術出版書」はそうあるものではない、と思わされることだろう。編集者の「立ち位置」はどこにある? 「目次」(内容構成)によって「セガン研究」の構造を示し、その構造ごとに適した論文を配置する、そして、その論文は、清水氏が情報収集した論文を候補にして原作筆者に収載許諾をとる。もちろん新しく書き下ろしを依頼もしただろう。そういう編集作業の過程で各論文間に存在する矛盾、揺らぎがあるとしたら、編者はどのように対応すべきだったろうか。それへの姿勢(編集者注記などの添え書き)が見られない限り、少なくとも、研究物としては検証性に乏しく、継承すべき科学性に乏しい、という厳しい批判を甘受するしかない。

(追記) ビセートル救済院内の「学校」の最初の「白痴の教師」はセガンだということになっているが、たとえば『イリュストラシオン』という当時の新聞には、白痴者に対する読み書き訓練を「学識のある看護人(infirmier)に委ねる」という記事内容を見ることができし、また、公的文書の中にも見ることができ。果たして「看護人」は「白痴の教師」とは別のキャラクターだったのか同一だったのか、ケースバイケースで、同一であったり別であったりしたのか、そのあたりを詳細に検討しなければならないが、同紙の表現を見る限り、「看護人」と「白痴の教師」とは同一職能として理解されているようである。セガンは「監視人(surveillant)」の必要性をしばしば強調しているが、「看護人」とは明確に区別して「セガン史」を読み解く必要があるように思う。

そういう視点を用意すると、公的史料では、ビセートルにセガンが着任する以前に「看護人」が存在するが、ビセートルの「学校」は「セガンが創設した」(中野善達氏)という虚説^{ガセネタ}に拠らない限り、『イリュストラシオン』にイラストで描かれた「白痴学校」も、ウージェーヌ・シュー『パリの秘密』で綴られた「学校」と「学校の先生」も、セガンに限定して語ることは危険だろうと思う。ビセートルの「白痴学校」はセガンが着任する前に開設されているのであるし、

シューが実際に訪れたのが 1842 年以前である可能性もあることを念頭に置かなければならない¹⁴。それにしても、セガン以前の「看護人・ドラポスト」なる人物についての情報がまったくないに等しい現在ではある。一方、各種ビセートル史にセガンが必ず登場するのも、セガンはそれだけ「事件な人」であったのだろう。

2003 年に「セガン」の世界に参入した時には、セガンを歴史的に位置づける段階は終わっていた。研究者それぞれのキャラクターにもよるが、ぼくが「セガン」に導かれた時には、セガンは「聖人」そのものとして捉えられていると感じさせられた。一点の瑕疵もない人物として描かなければならないという強迫性さえ感じた。なんたって、「人間でない」とされた処遇を長く背負わされてきた白痴を、人間だとして捉え、教育をし、成功させた傑物(清水寛氏)なの^{ガセネタ}が^{ガセネタ}か^{ガセネタ}ら^{ガセネタ}い^{ガセネタ}だ^{ガセネタ}て、虚報を創りあげ、あるいは解釈することが許されるはずはない。従って、先人に続いてぼくがなそうとしたことは、その「位置づけ」の過程で付与された諸情報のプラス・マイナスを史料に基づき操作し、実像に近いセガン像を形成することであった。

しかし、まだまだ力が及んでいないように思う。

¹⁴ シューは『ジュルナル・デパ』紙 1843 年 8 月 25 日号にビセートルの「学校の先生 le Maître d'Ecole」を描いている。